

国く栖ず奏そう

特集

奈良ニュース

奈良を知ろう

暮らしに役立つ

おしらせ



吉野町 浄見原神社

皇室と国栖奏

国栖奏の歴史は古く、応神天皇に国栖人が歌舞を奏したことが『日本書紀』に記されています。また、大海人皇子（後の天武天皇）を、国栖人が歌と舞でもてなし、喜んだ皇子が「国栖の翁よ」と呼んだことから「翁舞」とも呼ばれています。古代から大嘗祭や節会など、皇室の重要な行事で奉奏されてきました。

現在は、浄見原神社と檀原神宮（神武天皇祭）で、年2回定期的に奉納しています。浄見原神社は天武天皇をおまつりしている神社で、神社横を流れる吉野川の淵は「天皇淵」と呼ばれています。皇室との深い縁を感じつつ、奉納しています。

厳かな奉納

旧暦の1月14日に国栖奏は行われます。当日の朝から保存会と自治会が舞台の清掃や受け付け、飾り付け等の準備を始めます。13時、狩衣や烏帽子などの装束に身を包んだ12人が、舞翁2人、笛翁4人、鼓翁1人、歌翁5人の順で参道を歩きます。道中でお祓いを受け、笛翁がみやびやかに演奏する中、険し



吉野町南国栖に伝わる神事。国栖奏保存会 会長の松田利宏さん、会員の和泉安修さんにお話を伺いました。

い参道を舞殿へと進みます。

舞殿では、祝詞の後に一歌、二歌、三歌の順で和歌が謡われ、舞翁が鈴と柶を手に立ち上がり、舞いながらゆつくりと1周回る所作を4回行います。その後、四歌が謡われ、全員が手を口元に当てて体を反らす「笑いの古風」をして演舞は終わりです。厳かな雰囲気の中で響く笛や鼓の音、独特の所作は古くから伝わるものです。

伝統を守るために

歴史ある神事のできる限り昔のまま行っており、奉納するご神撰（お供えもの）は、山菓（栗）、醴酒（一夜酒）、腹赤の魚（うぐい）、土毛（根芹）、毛瀾（赤蛙）を、奉納の度に、地元で準備してお供えています。

明治天皇や大正天皇の前で奉奏した話を聞いており、また、私たち自身も平成遷都1300年記念祝典で、当時の天皇皇后両陛下に奉奏する機会が得られたことを光栄に思っています。

新しい「令和」の時代も、この地に伝わってきた神事を大切に、守り、継承していきたいです。



保存会の和泉さん、松田さん



行って
みよう!

浄見原神社
所吉野町南国栖1

旧暦1月14日(2020年は2月7日)

関無形民俗文化財については、県文化財保存課 ☎0742-27-8124 FAX0742-27-5386